

上野彦馬とその時代

姫野順一

藤堂藩（津藩）に出仕していた上野彦馬は文久2（1862）年春、同志堀江鉄次郎らの慰留を断り、長崎で蘭化学を深めるべく津を出立した。道中、京都の蘭学者広瀬元恭を訪問して、蘭学の講義を聞いた。

広瀬は江戸の蘭学者坪井信道の日習堂（現東京都江東区深川冬木町の区立深川第一中学校）で塾頭を務め、すでに物理学を説いた「物理学提要」や生体論である「知生論」、生理学書「人身窮理」、軍事学書の「築城新法」などを蘭書から和製漢文や和文に翻訳していた。当時「天下の学者は己一人」という風を誇り、京都で蘭学の時習堂を開いていた。しかし、この講義は彦馬にとって陳腐なものがあった。彦馬が「舎密局必携」の著者と知った広瀬は、「是は左様でござるか」と大層丁重に扱おうようになったが、「是じゃ仕方がないとおもふた」彦馬は早々に広瀬の元を辞し、長崎の母

親が暮らす銀屋町に帰ってきた。

▼繁盛

長崎では恩師ポンベはすでにオランダに去り、ハラタマが代わりに、医学伝習所から改名した小島養生所医学所で理化学を教えていた。彦馬はこれを聴講したが、それでは生計が立たない。転機は当時出島の仲買商をしていた内田九一が彦馬に提供した写真機材であった。慰み半分で撮影をしていたが、やがて評判を聞きつけた蘭人、中国人、長崎人が写真を求めるようになった。彦馬は無料で応じていたが、「身上をつぶす」という異母兄俊平ら親戚の不服を聞き入れ、文久2年の秋、「上野彦馬撮影局」の看板を掲げて営業写真館を開業した。

⑤ 長崎帰郷

代価は一組二分（一両の半分、約1方匁）。これが当たり、1日に50〜60人も客が来て繁盛したという。開業場所は中島川支流の銭屋河畔、父俊之丞の硝石



長崎村馬場郷二而銀屋町上野彦馬家屋跡地図
安政6（1859）年「御用留」（長崎歴史文化博物館蔵）



「コック・アルバム」の一枚。上野彦馬兄弟と友人たち。中央が彦馬。その右が弟幸馬 1864年ごろペイント撮影（ライデン大学図書館蔵PK-F-60936-035）

ゆかりの地に写真館開業



手を隠して写真に納まる女性たち 1866年ごろ「上野彦馬撮影局—開業初期アルバム」（江崎龍甲店蔵）



撮影局の屋外撮影場面 1866年ごろ「上野彦馬撮影局—開業初期アルバム」（江崎龍甲店蔵）



●若宮稲荷神社から新大工方面を望む 1866年ごろ「ボードインコレクション」（長崎大附属図書館蔵）
◎坂本龍馬が撮影されたスタジオ



精錬所跡であった。開業当時の屋敷の絵図面が残されている。絵図の下側が清流の銭屋川。左の建物は彦馬の居室。右は写真修行の弟子の寄宿舎として使われた。右奥には道路に沿って硝石精錬所と更紗場、鋳物場が並んでいる。精錬所跡の荒れた様子は元治元（1864）年ごろ、彦馬と弟の幸馬が友人らと撮られた写真の背後にうかがえる。ちなみに彦馬は結婚する慶応2（1866）年までは、母の住む銀屋町と上野彦馬撮影局がある中島の間を往來したようである。

▼迷信

最初の撮影場所は光線が十分な屋外であった。反射光線は白いついたで調整された。「中央で写ると早死にする」という迷信のため、写真中央の人の顔がつぶしてあるものもある。また、女性は「手が写ると魂が吸い取られる」という迷信から、撮影の際には手を覆い隠した。

彦馬が写真を本職としたのは開業2年後の元治元（1864）年からとされる。のちに、坂本龍馬らたぐさんの人物が写されたス

九一は幸馬と連れ立って慶応元（1865）年に大阪天満で写場を開業し、やがて江戸に出て成功する。亀谷は文久2（1862）年ごろ、娘のトヨを連れて京都に行き、知恩院の境内で写真業を営み、京都の初期写真師となる堀内信重や堀与兵衛に写術を教えた。野口はのちに西南戦争の戦場写真撮影する彦馬に同行する。

（長崎外国語大学長）
|| 偶数月の第3日曜付サンデーふんに掲載 ||